

英語文法項目系統表作成の試み

— 名詞・形容詞・副詞・接続詞を中心に —

神谷 昇 西垣知佳子 安部朋世 小山義徳

千葉大学・教育学部

Creating a Grammar Chart: With Special Reference to Nouns, Adjectives, Adverbs, and Conjunctions

KAMIYA Noboru NISHIGAKI Chikako ABE Tomoyo OYAMA Yoshinori
Faculty of Education, Chiba University

本稿では神谷・西垣・小山(2016)で提案した英語における動詞を中心とした文法項目の系統表の作成手法を踏まえ、主に中学校で学習する対象とされている名詞、形容詞・副詞、接続詞を中心とする文法項目を調査し、その結果に基づいた文法項目系統表を提示する。具体的には、名詞については冠詞、前置修飾、数(すう)、後置修飾、名詞節が、形容詞・副詞については比較と叙述・限定・後置修飾が、接続詞については従属接続詞と等位接続詞が学習の対象となっていることが判明した。本稿ではこれらの各項目について生成文法で仮定されている統語構造を踏まえレベルごとに整理したものを文法項目系統表として提示する。動詞を中心とした文法項目系統表とあわせ、本稿で提案する文法項目系統表により、中学校で学習する英文法の全体像が明らかになり、学習・指導上の効率が高まることが期待される。

キーワード：文法項目系統表(grammar chart) 名詞(noun) 形容詞(adjective) 副詞(adverb)
接続詞(conjunction)

1. はじめに

近年、Communicative Language Teaching (CLT) の普及に伴い、いわゆるコミュニケーション重視の観点から英語の授業実践が行われ、英語の「流暢さ」は高まってきたように思われる。しかし、その一方で、文法の「正確さ」がおろそかになってきたという指摘(例えば金澤, 2011; 白井, 2014; Richards and Rodgers, 2014)も散見されるようになり、文法指導の重要性が再認識されるようもなってきた。さらに、現行の学習指導要領およびその解説(文部科学省(2008a, b))も、他者とのコミュニケーションを図る上で文法も必要不可欠であるという認識からその適切な指導を求めており、ここからも文法指導の重要性がうかがえる。そして、ベネッセ総合教育研究所(2012, 2014)が中学生や高校生に対して実施した調査結果では、文法が重要であると考えている生徒が一定数いることが報告されており、この結果からも、英文法の学習・指導が必要とされる状況になってきたと言える。

以上のような背景を踏まえ、筆者らは「データ駆動型学習(Data-Driven Learning; DDL)」と呼ばれる手法を用いた効果的な文法指導法を開発し、実践研究を通して、その手法の有効性を実証してきた(例えば、西垣・小山・神谷・横田・西坂(2015)、西垣・小山・神谷・尾崎・西坂・横田(2015))。しかし、神谷・西垣・小山(2016)で指摘したように、筆者らが行ってきた実践研究はどれもごく限られた文法項目にのみ焦点をあてているために、文法項目間の関連性や、文法の全体像が捉えにくいとい

う欠点があった。それに加えて、他教科(たとえば算数・数学)では学習項目間の関連性が俯瞰できるような系統表が整備されているにもかかわらず、英語の文法学習においてはそのような系統表が作成されていないことも問題点として神谷・西垣・小山(2016)で指摘した。

このような問題点を改善するために神谷・西垣・小山(2016)では英語学・言語学、その中でも特に生成文法が提唱する統語論の枠組みにもとづき、動詞を中心とする文法項目について整理し、項目間の関連性をまとめたものを「文法項目系統表」として提示した(詳しくは第2節を参照されたい)。しかし、この「文法項目系統表」はあくまでも動詞を中心とした項目に限られ、他の事項(例えば名詞の複数形、形容詞の比較級や最上級)が考慮に入れられていないという点で不十分である。

以上の背景を踏まえ、本稿では中学校段階で導入される名詞、形容詞・副詞および接続詞に関連した文法項目に焦点をあて、それらを英語学・言語学の観点から体系的に整理したものをそれぞれ「名詞の文法項目系統表」「形容詞・副詞の文法項目系統表」「接続詞の文法項目系統表」として提示する。以下、第2節では、神谷・西垣・小山(2016)で提案した動詞を中心とする文法項目系統表について概観する。第3節では、神谷・西垣・小山(2016)の手法に倣い、名詞、形容詞・副詞および接続詞に関係が深い文法項目を中学校用英語検定教科書から抽出し、その特徴や名詞、形容詞・副詞、接続詞が含まれる句の構造を踏まえた文法項目系統表を提示する。第4節では本論のまとめと今後の課題を提示する。

2. 動詞を中心とする文法項目系統表

第2節では、神谷・西垣・小山(2016)より提案された動詞を中心とした「文法項目系統表」について概観する。なお、それを提案するに至った背景については前節で触れたので、本節では系統表が立脚している文の構造についての説明と「系統表」の提示にとどめる。

まず、文の構造についてであるが、神谷・西垣・小山(2016)ではあまり詳しく触れることができなかったため、本稿で改めて図1を用いて簡単に説明する。生成文法では、単語はいくつかのまとまり(「構成素」と呼ぶ;たとえば「名詞句(NP)」)を構成し、それらが結びつくことでより大きな句が形成され、最終的に文が形成されると仮定している。具体的には、図1に見られるように、目的語や副詞的な語句と動詞が動詞句(VP)を構成し、それが時制要素(たとえば過去形をあらわす-edや助動詞)や主語と結びつくことで時制辞句(TP(Tense Phrase))を形成し、最終的に、それが「補文標識(C; Complementizer)」と呼ばれる要素と結合することで1つの大きな文(CP)が形成される。なお、本稿では技術的な詳細は省略するが、VPは項構造(動詞がいくつかの要素(主語、目的語など)を必要とするのか)と密接な関連があると考えられている。また、VPとTPの間に能動態・受動態のような「態」、および、「進行」「完了」などの「相」に関する句(具体的にはVoicePやAspect P)を想定することもある。そして、Tは現在や過去のような時制を担うのみならず、助動詞や完了形のhave, be動詞が入る位置であると考えられており(いわゆる*have/be raising*)、また、CPは発話行為に関係すると考えられている。

以上のような言語学的な分析を踏まえ、VP, TP, CPに該当する文法項目を中学校用英語検定教科書から抜き出し、「レベル」ごとに整理したものが図2の系統表である。なお、神谷・西垣・小山(2016)でも述べたように、この系統表は中学校英語科の授業で扱われる文法項目を単に列挙しただけではなく、項目間の関連性までも考慮に入れて作成されているという点が特徴的である。

しかし、本稿の冒頭でも述べたように、図2は「動詞を中心とした文法項目」のみを扱い、「中学校で扱う文法項目の全体像」を俯瞰できていないという意味で不十分である。次節ではこのような問題点を克服するために、名詞、形容詞・副詞および接続詞を中心とした文法項目の系統表を提示する。

3. 名詞、形容詞・副詞および接続詞の文法項目系統表について

第3節では名詞、形容詞・副詞および接続詞を中心とした文法項目系統表を提示する。まず、名詞に関係が深いと考えられる文法項目を中学校用英語検定教科書から抽出し、英語学の観点から分類した結果を述べる。そしてその結果を踏まえて名詞の文法項目系統表を提示する。次に、形容詞・副詞が関与する文法項目について、同様の手法を用いて調査を行った結果と文法項目系統表を提示する。最後に、接続詞についても同様の手法により作成した系統表を提示する。

3.1 名詞

はじめに、名詞と関係する文法項目について調査を

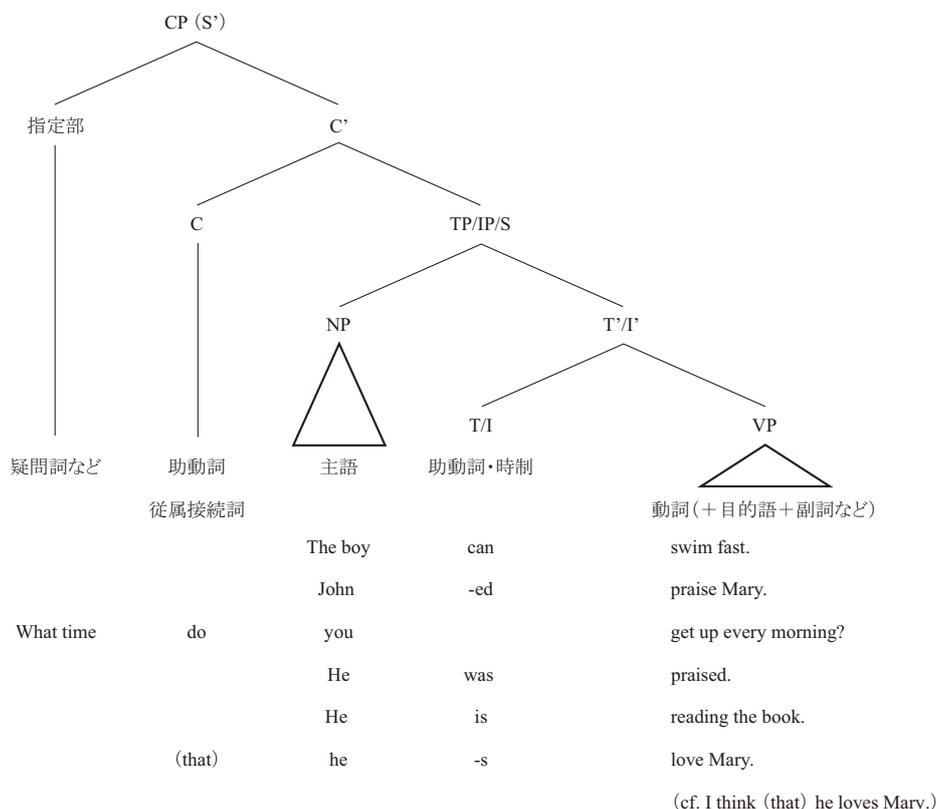


図1 文の構造

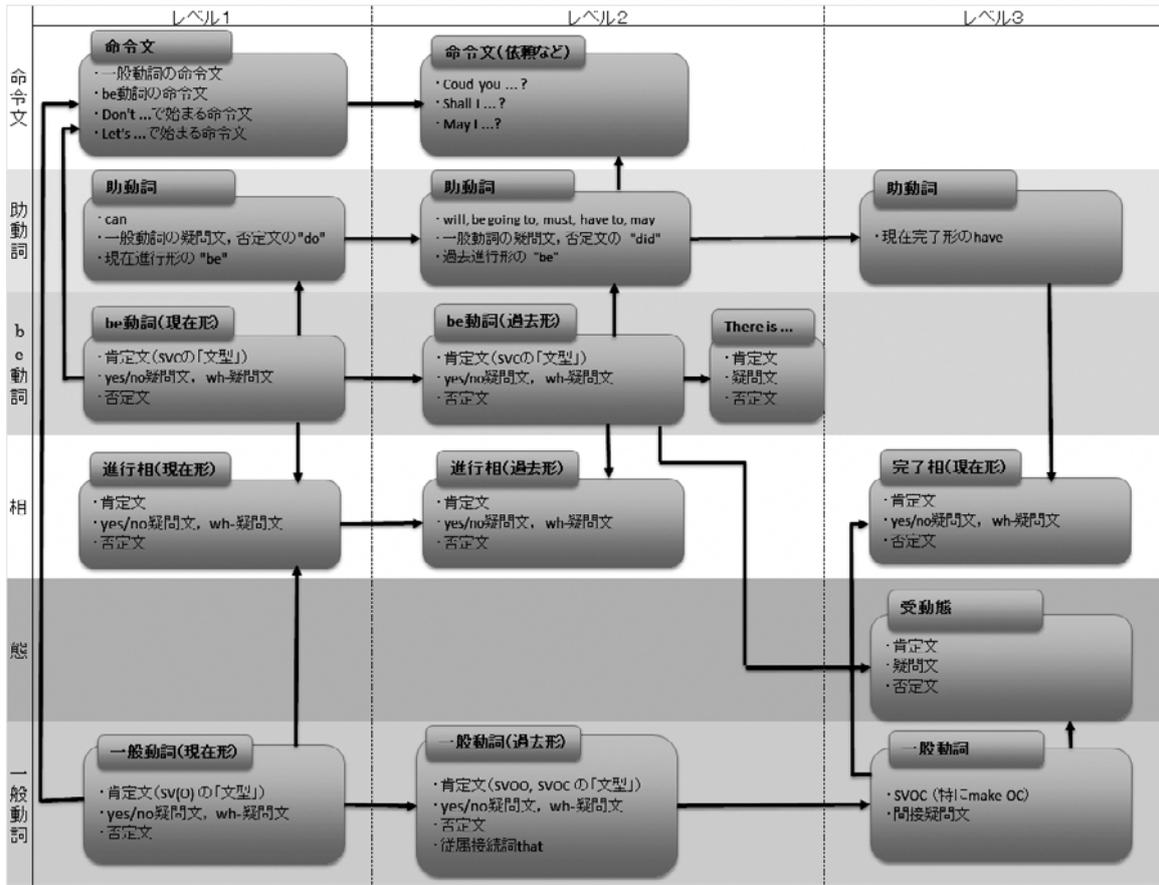


図2 文法項目系統表 (神谷・西垣・小山 (2016))

行った結果を提示する。神谷・西垣・小山 (2016) に倣い、中学校用英語科検定教科書に掲載されている文法項目を調査し、名詞句の構造 (後述) の観点から整理したところ、表1に示すような「冠詞」「前置修飾」「名詞・数 (すう)」「後置修飾」「名詞節」の5項目が抽出できた¹⁾²⁾。なお、

以下の表に掲載されている例文は特に断りがない限り、すべてNew Horizon English Course (笠島・関ほか (2016)) から引用したものである (以下同様)。また、例文中のイタリックは筆者らによるものである (以下同様)。

表1 名詞を中心とした文法項目

文法項目	詳細	例
1 冠詞	<ul style="list-style-type: none"> 不定冠詞 定冠詞 数量詞 (代名詞・疑問詞の) 所有格 	<ul style="list-style-type: none"> It is <i>a</i> recipe. <i>The</i> recipe is not difficult. I want <i>two</i> lemons. This is <i>my</i> pen. <i>Whose</i> book is that?
2 前置修飾	<ul style="list-style-type: none"> 形容詞 (限定用法) 分詞の形容詞的用法 	<ul style="list-style-type: none"> This is <i>a nice</i> picture. Someone is in that <i>burning</i> house! The police found the <i>stolen</i> money in the car. (分詞の形容詞的用法の例は2つとも石黒 (監修) (2013) より引用した。)
3 名詞・数 (すう)	<ul style="list-style-type: none"> 名詞の種類 (名詞の単数形・複数形・可算名詞・不規則変化名詞・不可算名詞) 代名詞・疑問詞 (主格・目的格) 動名詞 	<ul style="list-style-type: none"> I want <i>a</i> lemon. I want <i>two</i> lemons. Collecting wood is hard work, especially for <i>women and children</i>. I have <i>a glass of</i> water in the morning. <i>He</i> is my friend. Do you know <i>him</i>? <i>What</i> do you have for breakfast? <i>Playing</i> soccer is fun.

文法項目	詳細	例
4 後置修飾	<ul style="list-style-type: none"> ・前置詞句 ・不定詞の形容詞的用法 ・分詞の形容詞的用法 ・関係節 	<ul style="list-style-type: none"> ・ My sister often draws the koalas <i>in the trees</i>. ・ I have many things <i>to do</i>. ・ The boy <i>playing the guitar</i> is my brother. ・ The language <i>used in Australia</i> is English. ・ This is a book <i>I brought from home</i>. ・ Deepa is a student <i>who likes music very much</i>. ・ This is a book <i>that [which] she wrote last year</i>. ・ He has a friend <i>whose wife is a singer</i>. <p>(関係代名詞whoseの例は石黒 (監修) (2013) より引用した。)</p>
5 名詞節	<ul style="list-style-type: none"> ・不定詞の名詞的用法 ・疑問詞 + to 不定詞 ・ It is ... to 不定詞 ・ want/tell/ask + 人 + to 不定詞 ・ 間接疑問文 	<ul style="list-style-type: none"> ・ I want <i>to be a chef</i>. ・ I know <i>how to protect myself</i>. ・ <i>It is necessary for us to prepare for disasters</i>. ・ I want <i>you to pass on the memories</i>. ・ Could you <i>tell her to come to my house at two?</i> ・ People needed a strong leader, and <i>asked Aung San Suu Kyi to join them</i>. ・ I know <i>what you mean</i>.

1の「冠詞」はa(n), theのような冠詞に加え, every, someなどの数量詞, (代名詞などの) 所有格から構成される項目である。これらは名詞句において最左端(つまり, 名詞句の中でも最も高い位置)に生ずる要素である。次に, 2の「前置修飾」には形容詞の限定用法や分詞の形容詞的用法(特にその中でも分詞が一語から構成される場合)が含まれる。3の「名詞・数(すう)」は名詞そのものの性質に関係が深い項目であり, 具体的には, 可算名詞・不可算名詞の区別が該当し, 可算名詞の場合にはさらに単数形と複数形の区別や不規則変化を有する複数形名詞(例: man/men)が含まれる。また, 代名詞の主格・目的格および, 動名詞もこの項目に該当する。4の「後置修飾」はその名称が示すとおり, 名詞の直後に置かれ名詞を修飾する要素であり, 具体的には, 前置

詞と名詞から構成される前置詞句, 不定詞の形容詞的用法, 分詞の形容詞的用法(特に, 分詞に修飾語句など様々な要素が付随する場合), そして, 関係節が該当する。最後に, 5の「名詞節」は, 不定詞の名詞的用法などが相当する。技術的な詳細は省略するが, 不定詞の名詞的用法は従属接続詞のthatにより導かれる従属節(例: I think that John is sick.)と同様の構造を持っている「節」(つまり「文」)であると生成文法では考えられており, このような分析を踏まえると本来は名詞句に分類すべきものではないが, 本稿では英語指導上の観点から, 文中における分布(例えば動詞の目的語の位置に生じる要素は名詞的性質を持つ)をも考慮に入れ, 名詞に関連する要素として列挙するのが妥当であると考えた。

なお, 上記の分類にあたっては, 図3に示す名詞句の

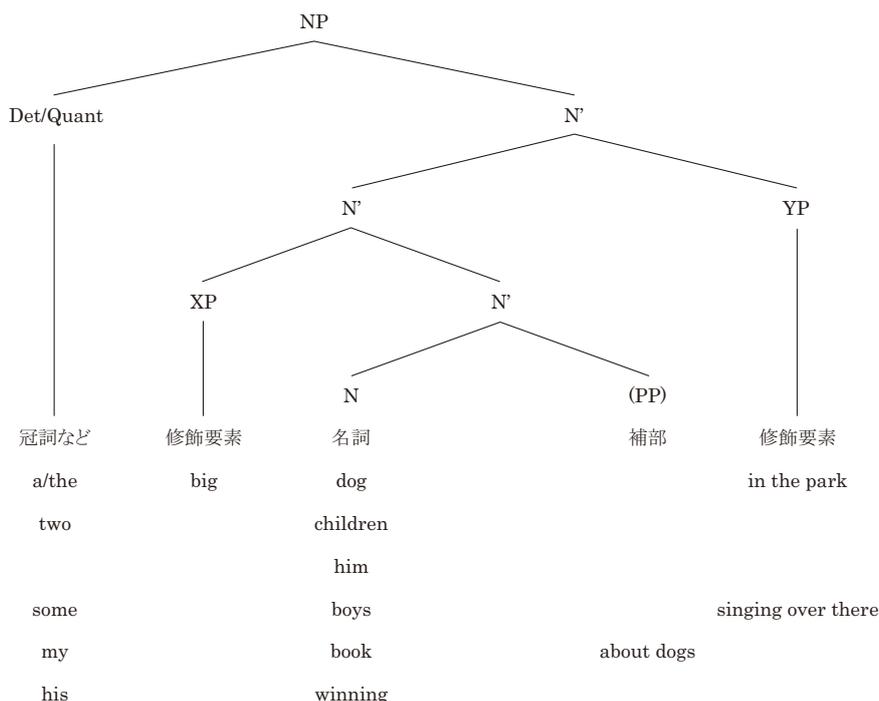


図3 名詞句の構造

構造を参考にした。名詞句には、中心となる名詞 (N) があり、その左側の構造上やや高い位置 (図のXPに該当する部分) に修飾語句である限定用法の形容詞や分詞の形容詞的用法が付加している。また、指定部と呼ばれる名詞句の最も高い位置 (左端; 図のDet/Quantの部分) には冠詞などがあらわれる。名詞の直後にくる要素については、まず、名詞に対する必須要素 (補部) が後続する。なお、補部については、本稿で検討の対象としている文

法項目には直接関係がないように思われるので、表1には含まれていない。名詞句の右端には前置詞句などの修飾要素があり、中心となる名詞から見て構造上やや高い位置 (図のYPに相当) に付加している。

文法項目系統表に話を戻そう。これまでの議論、および、文法項目のレベルと各項目間の関連性を考慮に入れると、図4に示す「名詞を中心とした文法項目系統表」が得られる。

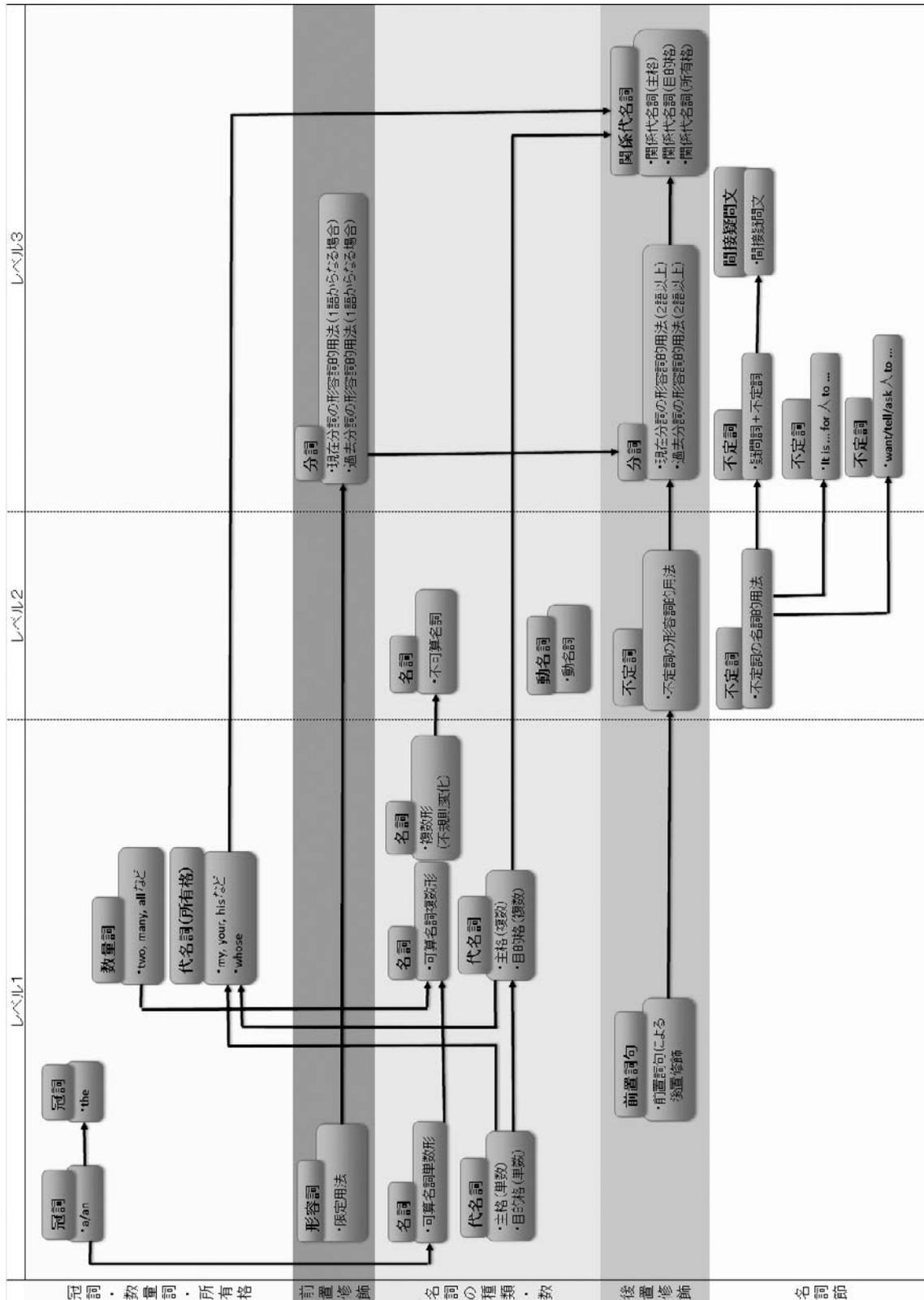


図4 名詞を中心とした文法項目系統表

例えば、後置修飾については、名詞の直後に前置詞句が置かれる形式がはじめに導入され、その後、不定詞の形容詞的用法、分詞の形容詞的用法、そして関係節へと発展していくことが理解できる。

3.2 形容詞・副詞

次に、形容詞と副詞に関わりが深い文法項目、および項目間の関連性について議論する。なお、以下でも神谷・西垣・小山(2016)で導入した手法を援用して調査を行った結果を報告するが、手法は繰り返しになるので省略し、結果と説明のみを提示する。

まず、形容詞や副詞と関係がある文法項目を抽出し、整理した結果が表2である。

表2 形容詞・副詞を中心とした文法項目

	文法項目	詳細	例
1	比較	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同等比較 (as ... as) ・ 比較級 <ul style="list-style-type: none"> -erを用いる比較級 moreを用いる比較級 不規則変化 ・ 最上級 <ul style="list-style-type: none"> -estを用いる最上級 mostを用いる最上級 不規則変化 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Miho swims <i>as fast as</i> Yuji. ・ The dolphin is <i>larger than</i> the tuna. ・ This movie is <i>more popular than</i> that one. ・ Winter looks happy, but her condition does not get <i>better</i>. ・ The blue whale is <i>the largest</i> of all animals. ・ This movie is <i>the most popular</i> in Japan. ・ Miho is my <i>best</i> friend.
2	叙述・限定・後置修飾	<ul style="list-style-type: none"> ・ 形容詞の叙述用法 (動詞の補語になる場合) ・ 形容詞の限定用法 ・ 不定詞の形容詞的用法 ・ 分詞の形容詞的用法 (前置修飾・後置修飾) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ The curry is <i>delicious</i>. ・ You look <i>happy</i>. ・ This idea makes me <i>happy</i>. ・ This is a <i>nice</i> picture! ・ I have many things <i>to do</i>. ・ Someone is in that <i>burning</i> house! (上記の分詞の形容詞的用法の例は石黒(監修)(2013)より引用した。) ・ The boy <i>playing the guitar</i> is my brother. ・ The police found the <i>stolen</i> money in the car. (上記の分詞の形容詞的用法の例は石黒(監修)(2013)より引用した。) ・ The language <i>used in Australia</i> is English.
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 動詞、形容詞、他の副詞を修飾する副詞 ・ 不定詞の副詞的用法 ・ 原因を表す不定詞 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Thank you <i>very much</i>. ・ It's <i>very</i> good. ・ I greet customers <i>to welcome them</i>. ・ I am surprised <i>to hear that</i>.

上記のとおり、形容詞・副詞の双方にかかわる文法項目として、中学校では、比較級・最上級が学習の対象となっている。また、形容詞については、叙述用法、限定用法、不定詞の形容詞的用法、分詞の形容詞的用法が、副詞については、他の語句を修飾する場合、不定詞の副詞的用法、原因を表す不定詞が学習の対象となっている。

表2の内容と文法項目のレベルを考慮に入れると、図5のような文法項目系統表が得られる。そして、この表から、たとえば「比較」の項目は同等比較からはじまり、-erを用いる比較級、moreを用いる比較級、不規則な変化をする比較級へと発展し、最上級についても同様にレベルが上がっていくことが理解できる。

3.3 接続詞

最後に接続詞について議論する。名詞、形容詞・副詞と同様に、教科書に掲載されている接続詞を抽出し整理したものが表3である。なお、従属接続詞としてのbeforeは、例えばNew Horizon English Courseには掲載されていないが、従属接続詞の全体像を理解する上で必要であると考え、本稿では収録することとした。

従属接続詞は文構造のCP付近にあると考えられているが(図1参照)、等位接続詞の句構造については諸説あること、および、本稿は言語分析を目的としていないことから、これ以上詳細を検討することはしない。

上記の調査結果を踏まえ、レベルごとに整理したものが図6である。

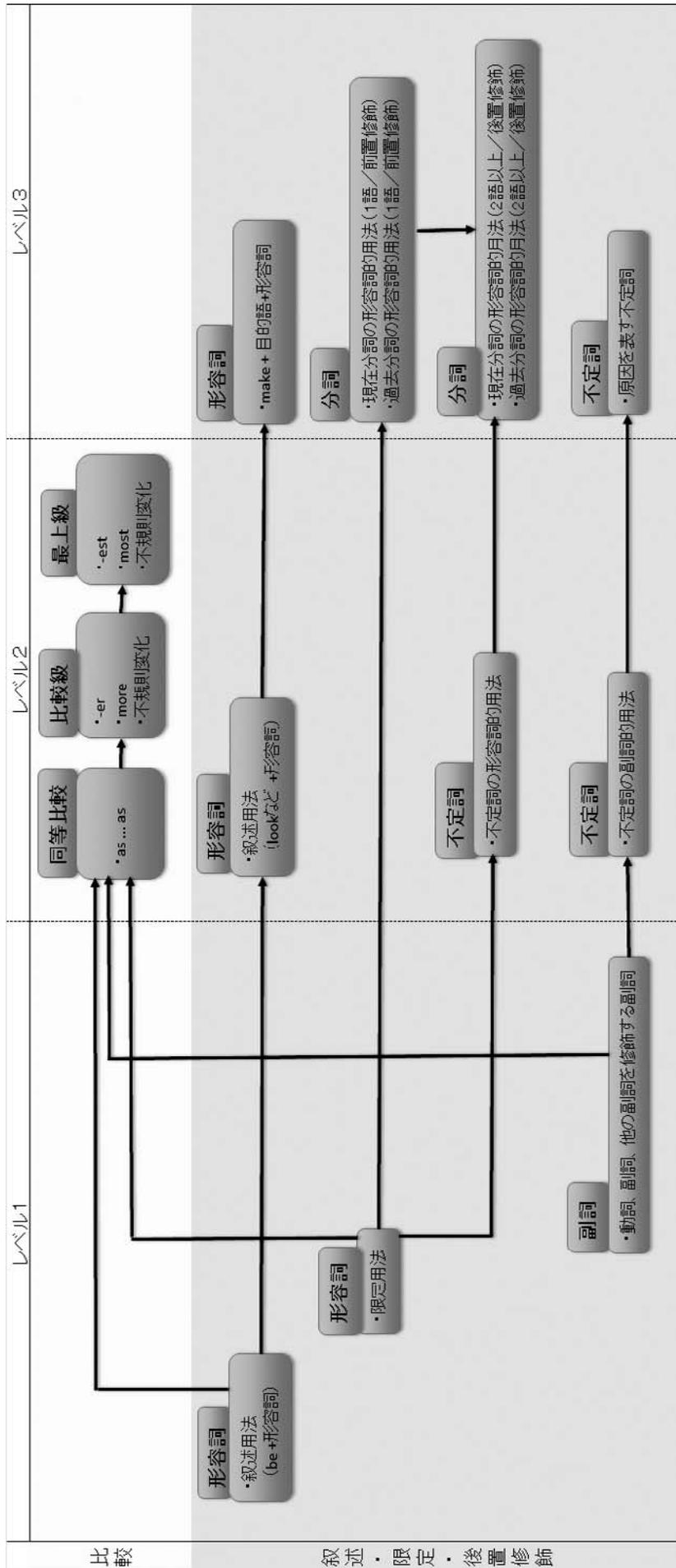


図5 形容詞・副詞を中心とした文法項目系統表

表3 接続詞を中心とした文法項目

	文法項目	詳細	例
1	従属接続詞	<ul style="list-style-type: none"> ・ if (もし~ならば) ・ that ・ when ・ because ・ since (~以来) ・ after ・ before 	<ul style="list-style-type: none"> ・ <i>If</i> you are interested, we will send you a catalog. ・ I think (<i>that</i>) baseball is interesting. ・ <i>When</i> you are busy, I will help you. ・ I opened the window <i>because</i> it was hot. ・ I've loved Japanese anime <i>since</i> I was a little child. ・ <i>After</i> the earthquake hit Japan in 2011, he wondered how to help as a craftsman. ・ You need to get a visa <i>before</i> you enter that country. (従属接続詞としてのbeforeの例は石黒 (監修) (2013) より引用した。)
2	等位接続詞	<ul style="list-style-type: none"> ・ and ・ but ・ or 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Look at the map <i>and</i> the table. ・ It's the world's second largest country, <i>but</i> its population is only thirty-three million. ・ Millions of people have listened to them at concerts <i>or</i> on TV not only in Japan, but also around the world.



図6 接続詞の文法項目系統表

図6から明らかなように、レベルが上がるにしたがって接続詞の種類が増え、文の構造が複雑になっていくことが理解できる。なお、since, after, beforeは前置詞としての用法とも深い関連があると考えられる。したがって、今後はこのような関連性をも考慮に入れて図6を再検討する必要があると思われる。

以上、第3節では名詞、形容詞・副詞、接続詞について神谷・西垣・小山(2016)に倣い、中学校で学習対象となっている文法項目を抽出し、レベルごとに整理を行い、その結果とそれに基づいた文法項目系統表を提案した。

4. まとめ

本稿では神谷・西垣・小山(2016)で提案した動詞を中心とした文法項目系統表の作成手法を援用し、名詞、形容詞・副詞、および接続詞について文法項目系統表を提示した。すでに神谷・西垣・小山(2016)で示唆したように、これらの系統表を文法学習・指導に活用することで、個々の文法項目の関連性や学習すべき文法項目の全体像ばかりでなく、学習段階をも容易に把握することができると考えられる。また、文部科学省(2008a, b)は、「英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど、効果的な指導ができるよう工夫すること。」と規定しているが、神谷・西垣・小山(2016)と本稿で提示した文法項目系統表を

活用することで上記の規定に沿った文法項目間の関連性を踏まえた体系的な指導・学習が可能になることが期待される。

最後に、残された課題について2点述べる。まず、神谷・西垣・小山(2016)、および、本稿で調査対象とした文法項目は中学校における学習内容にほぼ限定され、高等学校で学習する対象とされている文法項目については十分な調査が実施できていない。したがって、英文法の全体像を把握するためにも高等学校で学習する文法項目について早急に調査・整理し、文法項目系統表を作成する必要がある。次に、文法項目は、その形式ばかりでなく意味や使用(機能)も重要であると考えられているので(例えばCelce-Murcia and Larsen-Freeman(1999))、これらを考慮に入れて文法項目系統表を改訂する必要がある。ただし、以下の例から明らかなように、1つの意味や機能が必ずしも1つの文法形式に対応しているとは限らないので、この点については慎重に検討する必要がある。

- (1)機能：相手に何かを依頼するとき(たとえば窓を開けてほしい)
- Open* the window (please). (命令文)
 - Will* you open the window?
 (“Will you ...?” ではじまる疑問文)
 - Could/Would* you open the window?
 (“Could/Would you ...?” で始まる疑問文)
 - Would* you *mind opening* the window?
 (“Would you mind 動名詞...?” の形式)

- e. *I want you to open the window.*
 (“want 人 to 動詞”)
 f. *I would like you to open the window.*
 (“would like 人 to 動詞”)
 g. *It's hot.*
 (部屋が暑い状態で、このような文が発せられると、それには「窓を開けて欲しい」という含意がある)

上記のような課題が解決されたときに学校で学習する文法項目の全体像がより鮮明になり、それが英語の学習や指導を行う際に有益な指針となることが期待される。

謝 辞

本研究は平成28-31年度科研費基盤 (B) (JSPS 16H03441) の支援を受けて行われたものである。

注

- 1) 表1の *I want two lemons.* は *New Horizon English Course* では名詞の複数形の例として取り上げられているものであるが、名詞の複数形は *two* などの数量詞とも関連があるので (つまり、このような数量詞が出現すると名詞もそれに応じて複数形に変化するの)、表1では「冠詞」の中の「数量詞」にも入れることとした。
- 2) 関係代名詞 *whose* は中学校において学習の対象となっている文法項目ではないが、「文法項目の体系的な理解」という観点から、あえて表1と図4に収録することとした。したがって、本稿の文法項目の系統表は厳密には「中学校で学習する文法項目」の系統表とは言えない。

参考文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2012). 『小・中学校の英語教育に関する調査』 (速報版), http://berd.benesse.jp/up_images/research/soku_all.pdf, 2015年3月10日検索.
- ベネッセ教育総合研究所 (2014). 『中高生の英語学習に関する実態調査2014』 (速報版), http://berd.benesse.jp/global/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf, 2015年3月10日検索.

- Celce-Murcia, M., and Larsen-Freeman, D. (1999). *The Grammar Book: An ESL/EFL teacher's course* (second edition), Boston: Heinle & Heinle Publishers.
- 石黒昭博 (監修) (2013). 『総合英語 Forest』 (第7版), 桐原書店.
- 神谷昇・西垣知佳子・小山義徳 (2016). 「中学校における文法項目の系統化の試み: 文法学習表の作成とDDL学習教材への適応」, 『千葉大学教育学部研究紀要』 64, 301-308.
- 金澤洋子 (2011). 「第3章 外国語教授法」, 岡秀夫 (編著) 『グローバル時代の英語教育—新しい英語科教育法』, 東京: 成美堂, pp.17-34.
- 笠島準一・関典明ほか (2016). *New Horizon English Course 1, 2, 3*, 東京: 東京書籍.
- 文部科学省 (2008a). 『中学校学習指導要領』, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/_icsFiles/afiedfile/2015/03/26/1356251_1.pdf, 2015年9月6日検索.
- 文部科学省 (2008b). 『中学校学習指導要領解説外国語編』, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf, 2015年9月24日検索.
- 西垣知佳子・小山義徳・神谷昇・尾崎さおり・西坂高志・横田梓 (2015). 「フォーカス・オン・フォームに取り入れるデータ駆動型学習の効果の検証」, 『英語授業研究学会紀要』 24, 49-63.
- 西垣知佳子・小山義徳・神谷昇・横田梓・西坂高志 (2015). 「データ駆動型学習とFocus on Form—中学生のための帰納的な語彙・文法学習の実践—」 *KATE Journal* 29, 113-126.
- Richards, J. C., and Rodgers, T. S. (2014). *Approaches and methods in language teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 白井恭弘 (2014). 「コミュニケーション型第二言語教育とは何か」, 上智大学CLTプロジェクト (編), 『コミュニケーション型英語教育を考える』 東京: アルク, 10-24.